



廣田 勇 著  
地球をめぐる風  
—私の気象物語—

中央公論社中公新書，昭和58年4月  
25日刊，206頁，440円

いつも颯爽とした廣田さん，弁舌さわやかで自信に満ちている。そんな廣田さんを髣髴とさせる読み物である。

話は雨冠の字が登場しない気象学，わけでもここ20年程の中層大気力学研究の歩みである。「突然昇温」と「準二年振動」の発見を幕開け（1章）とし，以後この二つの現象の謎解きを経として，「地球の自転や重力という一般的な枠組に規定される流体運動の特性を……具体的な現象の形でとらえてきた気象学の歩みこそ，物理学の立派なひとつのパラダイムである」という廣田さんの気象学観が展開されていく。

「突然昇温」と「準二年振動」が話の中心に据えられているのは，単に，廣田さんがその研究推進者のひとりであり，恰好の語り手であるという理由によるばかりではない。1960年代以降の中層大気力学の課題が，それらの現象の解明にあったと言えれば言い過ぎになるにしても，それらをめぐる力学の展開過程を見ると，データ解析による現象論の確立，方法的基礎の模索，モデルの提唱，一般理論の構築という自然科学の進展の典型的な姿を取り出すことが出来て，物理学としての気象学を語ろうとする廣田さんのモチーフにぴったりであることがわかる。

むろん，上の二つの現象を解くにはいくつかの道具立てが必要だが，そこは廣田さんおさおさ怠りなく，この本の前半（2～5章）をそれに割いて，近代気象力学史の稜線をたどりながらコリオリの力，波，渦，ロスビー波などの概念を様々な譬え話を用いて説明していく。しかしこの前半部は単に準備に当てられているのではない。強調されるのは，気象力学の基礎的概念が大気現象から抽出されてくる過程であり，それをなした人々の「卓見」である。

一応の道具立てができると，「突然昇温」と「準二年振動」の謎解きに入る（7，8章）のだが，このあたりの話はいわゆる素人には決してわかりやすくはあるまいと思う。チャーニー・ドレイジンの「非加速定理」がオイラー平均描像，その破れとしての松野の「突然昇温モデル」がラグランジュ平均描像という記述の不統一に気

づく人もあろう。だがそんなことは，この本のモチーフにとってはどうでもよいことである。つまり，廣田さんは研究史を淡々と語ろうとしているのではなく，風の諸相とそのからくりを解説して見せることに情熱を傾けているのでもない。むしろそれらを材料にして，巷間流布している「気象学=天気予報」という図式を何とか崩し，物理学としての気象学という認識を気象界の内外に促そうとしているのである。それゆえに話は「突然昇温」や「準二年振動」に留まらず，これらの現象に主役を演じているとされる様々な波動と潮汐方程式の固有解との関連（9章），さらに他惑星の風の研究（10章）にまでも及んでいる。そんな具合で内容はかなり難しい。

こういえばいかにも取りつきにくい学問論風聞こえるが，決してそうではない。やや擬古的でロマンチックな文章は，硬軟相交じって時に詩歌に遊び，時に野球を語って飽きさせない。たとえば序章，ロセッティの詩や風をめぐる言葉のあれこれを引きながら，風の研究に誘っていくあたり鮮やかな語り口である。少々芝居がかった感なくもないが，それはそれで廣田さんの計算でもあるわけで，読者としては役者振りが楽しめるというものである。さらに副題にあるように話を「私の気象物語」に仕立てて，様々なエピソードを点綴し彩りを添えている。多くの人名が現われるが，殊に後半部に登場する人々の大部分が廣田さんの知己であり，そのことがこの本に廣田さん主催の華やかなパーティの趣きを与えている。国際的に活躍中の，イサム・ヒロタの面目躍如である。学問を語り，エピソードを語るその端々に，廣田さんの第一線研究者としての喜び，楽しみ，自負そしてゆとりを読んでもあながち誤読ではあるまい。また，モチーフからややずらして読むと「我々が何を知りえているか」というよりむしろ，「誰が何をやったか」に力点があるのがわかる。これは物語の特質でもあろうが，廣田さんの人生観の表れと敢えて深読みする方がおもしろい。そうすれば，ニュートンやハレーの歴史的位置に関する微笑ましい誤解も過剰なまでのハドレー礼讃も了解できるし，この本全体がこの20年の廣田さんの華麗な軌跡を「物語」っていることも見えてくる。

各章に引かれた気のきいたエピソードも楽しい。廣田さんのダンディズムでもあろうが，そうとばかりに読み流すのは惜しい気がする。どこか鬚りを帯びた言葉が多く引かれているように思うのは僻目であろうか。あるいは傷ついた青春の日々，廣田さんを訪れた詩であり言葉であったかも知れない。

（瓜生道也）